

ヨーゼフ・ボイス初期作品における国民社会主義の表象
——同時代催事および言説の分析——

水野 俊 (慶應義塾大学)

本発表は、ヨーゼフ・ボイス(Joseph Beuys, 1921-1986)の初期作品群を対象として、国民社会主義(ナチズム)ないしホロコーストという主題が作品化された過程を検討する。

ボイスによるナチズムの表象については、1957/58年のアウシュヴィッツ追悼碑コンペティションへの参加、またこのコンペティションに由来する作品《アウシュヴィッツ・デモンストラツィオン》を中心として多くの研究がなされてきた。その中で主題としてのホロコーストがボイス作品全体で果たす役割は、戦後ドイツ社会批判の一契機として広く認められている。しかし当時のナチズムを取り巻く議論、およびそうした議論に対するボイスの応答は、アイヒマン裁判(1961年)やフランクフルト・アウシュヴィッツ裁判(1963-65年)など、一般的な同時代状況の指摘を除けば詳細に検討されてこなかった。

そもそもナチズムをテーマとするボイス作品の制作当時の状況には不明な点が多い。《アウシュヴィッツ・デモンストラツィオン》や《エッセン強制収容所 I/II》(1963)を構成するオブジェの制作年は、本人によれば50年代後半から60年代初頭に遡るとされているが、この時期ボイスはほとんどコメントを残しておらず、制作年や作成意図についても後年のボイスの恣意的な変更・修正が疑われている。例えばアイヒマン裁判と同年の1961年秋のメモ書きには、ナチスに高く評価されたヴァーグナーやクヌート・ハムスンへの敬慕が記されていたが、後年の発言ではナチズムに連座する要素は排除されている。さらに作品全体が後から再構成されて改めてタイトルが付されているため、再構成の段階でボイスはナチズムへの言説を戦略的に変更したと思われる。

そこで本研究では、1960年代における作品再構成の過程を詳細に辿り直すことで、ボイスの初期作品が、ナチズムを批判する同時代催事や批評的言説を受けつつ作家自身によって新たな文脈へと接続されたことを指摘する。特に、ボイスと協働していた周辺作家によるナチズムへの批判的言及(ヴォルフ・フォステル「デ・コラージュ」シリーズ)、ボイスやゲルハルト・リヒターなどが出品した、ナチスによって壊滅させられた村を追悼する展覧会(「リディツェへのオマージュ」展、1967年)、そして1968年のドクメンタにおいて、ボイス作品とドイツの「克服されざる過去」との関係性を指摘する批評などが、ボイスにナチズム主題の作品化を促したと思われる。

ボイスによるこうした過去作品の再文脈化は、その後のボイス作品にも見られる戦略であり、晩年には上述の作品に見られるホロコーストという主題を冷戦化の状況に結び付けている。時事的問題に取り組みつつ作品を改作・再解釈し続けたボイスの制作態度の検討は、ボイスの芸術理念を一貫したものとして捉える従来の研究を見直す契機となりうる。